

生活科の実践を通じた現地理解・国際理解教育

前ヨハネスブルグ日本人学校 教諭

北海道北見市立西小学校 教諭 河原 賢

キーワード：現地理解，生活科，現地の人や自然との関わり

1. はじめに

アフリカの南端に位置する南アフリカ共和国。アパルトヘイトという暗い歴史に終わりを告げ、様々な人種が新しい国づくりを進めている。2010年のサッカー FIFA ワールドカップを控え、今後ますます注目される国になっていく。

ヨハネスブルグ日本人学校は、経済の中心都市ヨハネスブルグに位置し、児童・生徒数45名の小規模学校である。1966年の開校以来、すでに40周年を過ぎ、歴史ある学校である。2005年から3年間、低学年担任ということもあり、1・2年生合同の生活科を担当してきた。海外にある特性を生かした授業ができないかということで、生活科の目標や内容を改めて見直し、特に児童にとって身近な人々から学んだり、交流したりすることを重点に置きながら、現地理解教育や国際理解教育の教材を開発し、実践を行ってきた。今回はその中からいくつか紹介する。

2. 生活科学習指導の実践1「南アフリカの遊びを楽しもう」

(1) 身近な人から関わりをもつところから始める。

ヨハネスブルグ日本人学校の子どもたちにとって、南アフリカにしながら南アフリカのことについて意外と知らないことが多い。また、残念なことにあまりよいイメージもっていない。さらに、学校生活を送っている日本人学校のスタッフもみんな知っているわけではない。そこで、子どもたちにとって身近な南アフリカの事柄について理解し、さらに視野を広げていけるような児童を育てていくことをねらいとした実践を行ってきた。そこで、南アフリカのことを知る入り口として、身近なスタッフのことについて調べていくことにした。民族調べをした際に身につけた英語を使いながら、名前・民族を調べていった。人と人との関わりを通して、発見や気付きが子どもたちから出てきた。



【スタッフとの交流】

(2) 子どもたちが興味・関心のあるものから取り上げる。

低学年の子どもたちにとって遊びは大切なものである。生活科の学習で、けん玉、お手玉など日本の伝承遊びを取り上げ、遊びを通していろいろなことに興味・関心をもたせていった。なぜならば、体験化が次への興味・関心を生み出していくからであると考えたからである。

生活科の教科書の中に、昔の遊びを地域の人たちから教えてもらい、遊ぶという内容がある。海外にある日本人学校では実際に地域の人から学ぶことはできないが、子どもたちの中に名人がいて、その子たちから教えてもらった。その学習の延長に、自分たちの身近な人たちである日本人学校のスタッフから南アフリカの遊びについていくつか教えてもらった。スタッフの人たちも自分の国のことについて紹介できるとあって、子どもたちに積極的に関わってくれた。「ムラバラバ」(はさみ将棋に似ているもの)、「ディクト」(お手玉遊びに似ているもの)、「アロンボ」

(歌を歌いながらの長縄跳び)を教えてもらった。説明は全て英語であるが、ルールなどはスタッフが身振り手振りで行ってくれたこともあり、子どもたちは自然と習得していった。

(3) 最後は現地の人と一緒に遊ぶ

遊びを教えてもらってからどの遊びも夢中になり、自分たちで何度も遊びながら、どうすれば勝てるようになるのか、上手にできるようになるのかを考えた。そして、指導計画の最後に学んだことを深めたり、確かめたりするために、教えてもらったスタッフの人たちと対戦をしたり、遊んだりした。その場でも身振りでぶりをまじえながらお互いに何とかコミュニケーションを図っている様子を見ることができた。現地の人から学んだことを学びっぱなしにするのではなく、最後には、もう一度、現地の人と一緒に遊びながら理解を深めていった。このことはとても大切なことであると感じた。つまり、南アフリカの人たちとの関わりを通して、さらに違った視点で、南アフリカのことに興味・関心をもつことができたのである。

3. 生活科学学習指導の実践2「南アフリカのむかしは・・・」

(1) 自分の生活を見つめ、ご両親の小さい頃の様子と比べてみる。

日本と南アフリカの昔の遊びを学んだ子どもたちが次に学習したことは、昔の生活の様子についてである。子どもたちが意欲的に興味をもって学習ができるよう、まず初めに自分たちの今の生活について振り返ることにした。多岐にならないよう、次の事柄にポイントを絞った。食べ物、流行っている遊び、子どもたちが知っているアニメ、学校の様子、家での生活の様子である。個々に異なる部分もあったが、発表を通して理解していった。その後、自分のお父さんやお母さんが小学生だった頃について聞き取りをして、発表し合った。その中で、今の自分たちの生活と同じこともあれば、違いもあることに気付いていた。その違いがさらに課題解決の原動力になっていった。子どもたちの知らないことも出てきたので、担任が説明をしたり、再度両親に聞き取りをしていた子もいた。

(2) おばあさんからも話が聞きたい。

子どもたちの興味は、自分たちのおじいさんやおばあさんはいったいどんな生活をしているのかに移ってきた。南アフリカにいる子どもたちにとって、日本のおじいさんやおばあさんに会える機会が少ないこともあり、昔の生活の様子について知らないことが多い。そこで、ある子どものおばあさんが南アフリカで一緒に暮らしていらっしやることを知り、おばあさんご自身の子どもの頃について、その当時の写真を見せたり、昔の遊びのことについて記載されている雑誌を見せたりしながらお話をしていただき、さらに子どもたちからの質問に答えて頂く授業を行った。自分たちにとって身近な人たちから話を聞くことで、より昔のことを知ることができるのではないかと思った。話を聞いていくうちに、子どもたちの意識の中で、驚きや初めて知ったことがたくさんあった。それだけでも、子どもたちの変容を感じることができた。

(3) 南アフリカの昔はどうだったのだろう。

子どもたちから、「南アフリカの昔はどうだったの?」という疑問が出てきた。この疑問を解決するために、やはり日本人学校のスタッフの方々に「子どもの頃はどんな生活をしていたのですか?」と聞き取り調査を行った。また、一番年輩のスタッフの方からお話をしていただいた。食べ物、家の様子、学校など、昔の日本とは違うことにも子どもたちは気付いていた。今の自分たちの生活とも違いがあり驚いていた。現地の人たちから南アフリカのことについて子どもたち自身が聞くことで、日本との違いはもろろんのこと、今まで知らなかった南アフリカを感じたり、気付いたりすることができた。人と人との関わりを通して、発見や気づきが子どもたちから出てきた。

4. 生活科学習指導の実践3「スタッフとあいさつ」

(1) 子どもたちからの疑問。

入学した1年生の子どもたちは学校探検で、2年生から日本人学校の様々な場所に連れて行ってもらう、学校内の様子を知った。そこには、ふだんからお世話になっている現地スタッフの人たちがいたことに気付いていた。でも、日本人学校の子どもたちとは英語であいさつするものの、バスの中でドライバーとセキュリティが話している言葉、ガーディナー同士で話している言葉、黒人同士、白人同士になると英語ではない言葉が聞こえてくることを子どもたちは一つの疑問として持っていた。英語以外の言葉を知ることで、言葉の楽しさ、スタッフに積極的に関わったり、スタッフも子どもたちに声をかけてくれたりしてくれるのではないかという思いで学習を進めることにした。

(2) コミュニケーションを始めるには、まずはあいさつをしよう。

11の公用語がある南アフリカ。せめて、あいさつときは、いくつかの現地語でしてみるとスタッフの人たちが喜んでくれるのではないかとということで、4名のスタッフをゲストティーチャーとして授業に参加していただいた。まずは、「おはよう」と「ありがとう」という言葉を直接教えてもらった。同じ黒人なのに、民族によって言葉の違いがあるということ、お互いにコミュニケーションを図るため、3～4の言葉を話せるように努力していることに、子どもたちは驚いていた。次の日から、子どもたちは実際に習った言葉を使ってあいさつをしていた。学んだことを実際に使ってみることで、子どもたちとスタッフの心の距離が縮まったように感じた。



【授業の様子から】

5. その他の生活科学習指導の実践

(1) 観察活動からの現地理解

生活科の中で、観察活動も大切である。人との関わりだけではなく、自然との関わりにも関心を持たせるために南アフリカの植物や鳥を定期的に観察する活動を指導計画の中に盛り込んだ。南半球ということもあり、日本では見られないもあり、観察するものを決めて、変わっていく様子を学習していった。

植物では、春の時期にきれいな花を咲かせるジャカラングを取り上げた。副読本「大地から学ぶ」を活用し、南アフリカではどうしてジャカラングの木がたくさんあるのかについて学習をした。そして、校内にあるジャカラングの木を咲く前から観察し始め、どのように変化していくのかスケッチなどをしていった。鳥も同じように副読本を活用し、春になると学校にやってくる鳥たちの名前を覚え、鳴き声や習性なども観察を通して学んでいった。生活科の時間だけではなく、ふだんから意識して子どもたちは観察するようになり、学校外の動植物についても目を向けるようになっていった。

(2) 学んだことをみんなに伝える。

生活科で学んだことを自分たちの理解だけに終わらせることなく、誰かに伝えていくことも考えた。そこで、学校行事に位置づけられている学習発表会における発表と日本の学校との手紙による交流である。学習発表会は毎年現地理解教育をメインとした内容となっており、保護者や関心のある日本の方々にも観覧していただいている。低学年の子どもたちにとって学んだことを発表するよい機会となっている。また、日本の学校との交流では、生活科な

どで学んだ南アフリカのことを絵や文にし、手紙を添えて送った。もちろん返事もいただき、日本の様子などを少し知る機会となった。

子どもたちの様子を見ていると、南アフリカのことを学び、伝えていくことで南アフリカが好きになり、親しみをもって人や自然と関わっていけるようになったと感じることができた。

6. おわりに

日本人学校に勤務する中で、現地理解教育・国際理解教育を進めていくことが求められる。ヨハネスブルグ日本人学校の研究内容にも位置づけられていたが、日本の教科書を使って勉強していく中で、現地理解教育・国際理解教育と関連があるものについては、1時間でも扱っていくように心がけていた。今回は生活科からの視点で低学年の子どもたちでも楽しみながら現地理解教育を通して、国際的な視野を培っていけるよう実践を行った。せっかく南アフリカで生活しているのだから、南アフリカのことを少しでも多く理解し、学んだことを日本に帰ってから語れるようになってくれればと思っている。さらに、日本のよさ、南アフリカのよさも知って欲しいと思っている。私自身も南アフリカのことを語れるよう、今後南アフリカを題材とした授業を通して多くのことを伝えていきたい。さらに、国際的な視野に立てるような子どもの育成を図ると同時に、子どもと世界の距離が縮まってくれればと思っている。